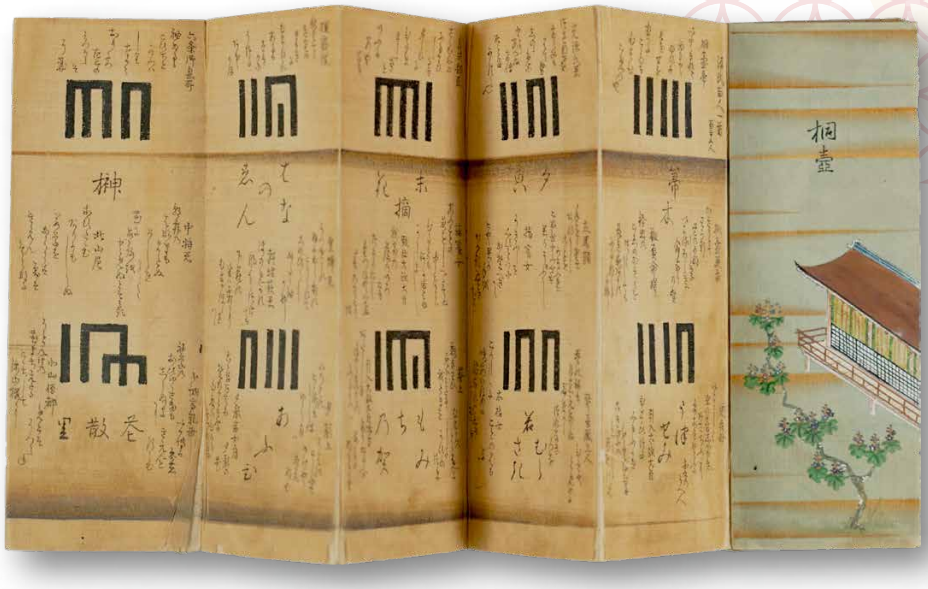
ISSN-1883-1931

大学共同利用機関法人　人間文化研究機構国文学研究資料館

国文研ニューズ

No.63　SUMMER 2023



『源氏百人一首』

目　次

●追悼

青田寿美さんを送る……谷川　惠一　1

●エッセイ

汲めども尽きぬ文献調査……馬場　美佳　2

国際共同研究の醍醐味……恋田　知子　4

●書評

ブックレット〈書物をひらく〉29
渡部泰明著『雲は美しいか　和歌と追想の力学』……田渕句美子　6

ブックレット〈書物をひらく〉28
木越俊介著『知と奇でめぐる近世地誌　名所図会と諸国奇談』……門脇　茉海　7

●トピックス

古典籍データ駆動研究センターへの誘い……海野　圭介　8

国際連携室「文献資料ワークショップ」―典籍との対面―……ノット・ジェフリー　9

能狂言研究への温かな誘い―日本古典籍セミナー北京2022―……李　知雨　10

講演会「源実朝の歌はなぜ心を打つのか」……西村慎太郎　11

ようやくクラウドファンディングのお礼ができました……太田　尚宏　11

モバイルミュージアム巡回展「小良ヶ浜の歴史・文化」開催……西村慎太郎　12

2022年度第2回こくぶんけんトーク
その話を、どんな本で読んでいますか？―「本」の時代の物語……松永　瑠成　12

ないじぇる芸術共創ラボ　アウトプットイベント4件……黄　昱　13

総合研究大学院大学日本文学研究コースの近況……齋藤真麻理　14

電子展示室「和書のさまざま」のご案内および通常展示について……北村　啓子　15

青田寿美さんを送る

谷川　惠一（国文学研究資料館名誉教授）

青田寿美さんが亡くなった。彼女とともに国文研で過ごしてきた者として、その早過ぎる死を心から悼みたい。

平成15（2003）年、青田さんは、当時の文献資料部第四文献資料室に着任した。私はその室長として彼女を迎えた。ロバート キャンベル、齋藤希史両氏の後をうけた3人目の助教授である。明治前半期の資料を中心対象とする近代部門として設置された第四室は、当初から資料の調査から収集までのプロセスをデジタル化することに取り組んでいたが、彼女の着任は、その基礎がようやく固まった頃であり、デジタル化された調査カードを用いた調査を積み重ねながら、集積したデータを国文研のメインフレームから公開するための準備に取り掛かっていた時期であった。データベースの設計と運用に注力していたのが、データの発信提供とその利活用に取り組む段階にまで達したのであり、こうした仕事を青田さんは全力で担ってくれた。国文研の近代書誌・近代画像データベースの運用は、長年にわたってデータベース科研による地道な実務に当った青田さんの功績なくしてはありえなかった。

デジタル化された近代の調査カードには、資料1点あたり12枚までの書影を付していることを含め、紙媒体の普通の目録からは得られなかった多様な情報がつまっている。青田さんはこのことに着目し、それを活用した新たな研究基盤への途をさぐった。彼女が主に目を付けたのは、調査カードにある「売捌所」と「蔵書印・書入れ」というふたつの項目である。本の末尾に記載されている売捌のデータから近代の複雑な書籍の流通網をとらえることができないか、売捌所を日本地図上にマッピングして可視化することを試みていたものの、彼女は中途でこの試みを抛棄する。調査先での限られた時間でときに何頁にも及ぶ売捌所をすべて打ち込むことは無理なことから、網羅的なデータが得られないと判断したためだろう。完全主義者たる彼女の面目がこのときは仇になったのではないかと、残念でならない。彼女が次に取り組んだのが蔵書印データであり、これが彼女の名をひろく知らしめることになった。調査カードの蔵書印の項目にはどういう蔵書印が捺されているのかを記すのだが、即座に読み取れない場合も多いので、その場合は書影にゆだねることとしている。調査カードに付された画像データには、（読めるかどうかとは別に）蔵書印がどこかに必ず収められているわけで、青田さんは、これの研究資源化に取り組んだのである。印譜を集めるところから始めた彼女の努力は、やがて近代の調査カードの枠を越えた蔵書印データベースとなっていった。近年のAI技術のめざましい進展に心を躍らせていたであろう彼女が、蔵書印データベースの彼方に何を見ていたのか、ついに聞く機会を逸してしまった。

データベースまわりの功績に光が当てられる青田さんだが、上田市立図書館花月文庫・岐阜市歴史博物館・新潟県立図書館・横浜市中央図書館・星槎ラボラトリー真山青果文庫・京都大学総合人間学部・和歌山大学附属図書館紀州藩文庫・大阪大学附属図書館忍頂寺文庫・立命館大学図書館白楊荘文庫などの調査を担当した他、国文研が大阪大学大学院文学研究科と実施した「近世風俗文化学の形成」などの共同研究にも主導的に加わり、貴重な成果を挙げていることを付け加えておきたい。

汲めども尽きぬ文献調査

馬場　美佳（国文学研究資料館学術資料委員会委員、筑波大学人文社会系准教授）

文献調査をテーマに、これから文学研究者を志す人たちに向けて書いてほしいというご依頼をいただきました。お言葉に甘え、徒然なるままに書かせていただこうと思います。今回は、近代以降、とくに私が専門としている明治期の話になります。おそらく、私の文献との関係は、とりたてて珍しいものでもなく、これも私自身の成長記録のようなものになってしまいそうなのですが、汲めども尽きぬ文献調査の何ものかをお伝えすることができたら本望かとも思っております。

大学に入学して以来、古い本、古い雑誌、古い新聞、ときには原稿類といったさまざまな近代文献の恩恵を被ってきましたが、とりわけ私が未知の文献として本格的に認識した最初は、大学院に入ってから出会ったボール表紙本だったと思います。筑波大学には、平岡敏夫先生が収集された西南戦争ものや、自由民権運動、憲法発布の時期に刊行されたボール表紙本が100冊近くありました。大学図書館の規定では明治以降の本は貴重書として扱ってもらえず、分散させないよう研究室保管となっていたのですが、明治期特有の気配を放つその本の山が気に掛かってはいたのだと思います。尾崎紅葉の小説「二人比丘尼 色懺悔」を研究しようとしていた矢先、なぜこの小説が当時の青年たちの心を鷲づかみにしたのか共感しかねていたとき、当時ご指導を頂いていた新保邦寛先生に、同時代の小説、ボール表紙本などをとにかく読んでみてはどうかとアドバイスをいただいたのがはじまりでした。手探りで（といっても内容は面白いので苦にはならず）読み進めるなかで、いつの間にか、それらが自分にとって貴重で有益な情報を与えてくれる文献に変わり、当時の創作方法、趣向や脚色、言葉や文体から発想するよう思考を切り替える必要性を実感できたように記憶しています。ほかに東京教育大の旧蔵書も開架図書として身近にあり、教育と結びつきの強い心理学等の明治本が、当時の知識人の教養を知る格好の文献ともなりました。さらには国会図書館に明治本のマイクロフィッシュの複製を依頼して、大学の機材で読んだり複写したりしたこともいまとなっては懐かしい。すでにカード文化も廃り始めていた頃でしたが、退職された先生が残されていった大量のカードを譲りうけ、語彙カードを作ったりもしました。最近、国会図書館の次世代デジタルライブラリーの全文検索機能によって、こうした作業ですら不要になってしまったといえるのかもしれません。ただ、現状ではカードにとった言葉が必ずしも検索でヒットするわけでもないようで、読みながら気にとまる言葉とは、質的に異なるのだろうなという感覚があります。

谷川惠一先生が指摘していらっしゃいますが、国会図書館蔵本と実際に出版流通した本とは異なります。ただ、博士論文を執筆した頃、自身が読んだ明治本の内容を共有してもらうのに都合が良いのは国会図書館の蔵書しかなく、論文の客観性を考えたとき、底本についてどうするか思い悩んだ経験があります。国文研の近代書誌・近代画像DBが公開されるようになり、その後、リプリント近代文学シリーズ（平凡社）が刊行されたわけですが、現代読者が、明治期に流通していた文学書を、共有し、検証できるという状況を作ろうとしてくださったものとして目に映りました。

一時期、近代書誌・近代画像DBのもととなる近代文献調査にも、九州エリアで参加させていただいたことがあります。このとき知った、近代書籍の個体識別という発想も新鮮でした。本コーナーで執筆された齋藤希史先生が詳しく調査の趣旨や歴史をお書きくださっていますが、植物採取のようにカード（といってもPC上ですが）をとっていくという作業は、一冊一冊身体測定をし、情報を記録していくという意味で博物学的な楽しさがありました。書き込み、手垢、破損といった本たちの名誉の負傷も含め、近代日本の出版文化・読書文化の記憶が蓄積されているわけです。なにより一冊一冊を個体識別するという国文研のスタイルは、近代の大量出版という言葉に惑わされない、一冊ずつのアウラをすくいあげるものだと思います。これは世界でも稀な試みなのではないでしょうか。かつて、大量生産された万年筆が、実は生産の段階から微妙な違いがあり、さらには個々人の身体性にあわせて変容していくという話を聞いたことがあるのですが、本もまた生まれ落ちた瞬間、作り手、売り手、読み手を経て、歴史を刻む記録媒体として成長していくもののようです。

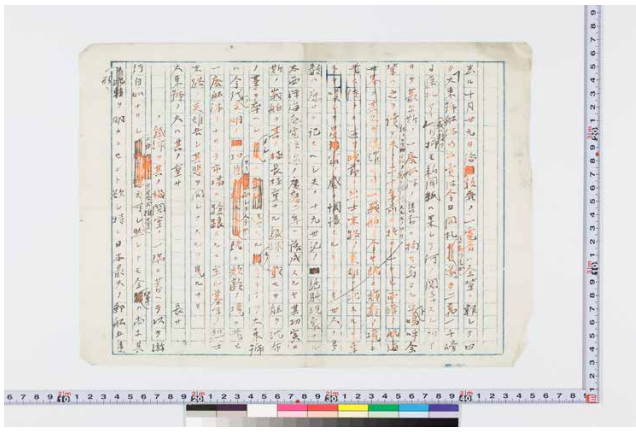
政治行政の情報機関である国会図書館がその性質上テキスト優先の保管場所だとすれば、10年ほど前に森田思軒の調査をはじめた関係で利用するようになった大英図書館は、元博物館ということもあり、刊行物をモノとして保管する博物学的なあり方をしていて新鮮に見えました。19世紀までのものはレアブックスとして扱われ、当時すでにデジタルで画像を確認することもできましたが、同時に、現物も特段の手続きなしで閲覧することが可能でした。140年近く前にロンドンを訪れた思軒の文献環境が大英図書館のなかで再現できそうな感覚が刺激的でした。思軒は

ユゴーやヴェルヌの英訳本からの重訳とともに大英帝国の文化圏における定期刊行物から翻訳していることが次第にわかり、雑誌はもちろん、新聞にいたる定期刊行物のデータベース化にもずいぶん助けられました。日本も書籍と雑誌がだいぶデジタル公開されるようになり驚くほど便利になりました。ただ新聞だけは、世界的に見てもかなりハードルが高いようです。もちろん、ある程度の規模の図書館にゆけば古い新聞をマイクロフィルム等で見られること自体、本来は稀有なことなのかもしれませんが、近代の文学と新聞の密接な関係を思うと、歴史的文献として、文学作品を数多く世に送り出してきたさまざまな新聞が身近になればと思うことしきりです。

近年では岡山県笠岡市に寄託されている思軒の書簡や草稿類の資料調査もさせていただいています。この資料群は、思軒の子孫にあたる方々（現在は曾孫の白石孝さん）が継承されているのですが、思軒の妻・豊さん、娘の下子さん以来、思軒が一字でも書き記したものであれば保存したとのお話に衝撃を受けたことを覚えています。詳しくは「女三代の守り手」（『森田思軒とその交友』松柏社、2005）に故・白石静子さん（下子さんの長男・男也さんの配偶者）が書かれていますが、戦中に防空壕を作り資料を守ろうとしたものの湿気で変質し諦めざるを得なくなったという無念の思いや、東京大空襲という命の危機に、なによりも資料を疎開させ散逸を防ごうとされたという使命感の強さに圧倒され、一枚一枚調査をさせていただくたびに、思軒の手だけでなく、後世に残すことを使命とされた女性たちの指先が見えるようで、身の引き締まるような思いがします。このようにして守られてきた思軒の草稿157点を、国文研では昨年よりデータベースにて公開しています。紙ゆえに、どうしても経年劣化からは免れないなかで、保存と活用を両立させ、引き継いできた方々の思いを継承する、ひとつの道が撮影によるデジタル化でもあるのだと思います。近代における手稿類の保存と活用、ときには復元もまた喫緊の研究課題になっています。

一方、大量に印刷された明治の雑書類も、当然のことながら年々減少し、現代ではその意義でさえ見えにくくなっているものがあります。ですがそれは、今は失われつつある当時の思想や感性が隠れている大切な文献でもあります。たとえば、現在進行中の国文研の共同研究会「近代文学における文例集・実作・文学読者層の相関の研究」（代表・多田蔵人先生）は、古本屋でよくみかける美文集や文範集を改めて文献としてまなざすことで、現代の文学研究に活かすことができないかという挑戦でもあります。今回参加させていただいて、私の中で一度完結していた紅葉の「二人比丘尼 色懺悔」の研究に、新たな視点を得る契機となったのですが、そのことに自身でも大変に驚き、文献調査の底知れなさを感じました。

文献とは、それがこの世に生まれた当時の状況に近づける知性や感受性の記録の媒体でもあるのだと思います。そして、媒体自身もまた歴史の産物であれば、情報が付着し蓄積され、読み解かれるべきものとなっていく。近代はそのバリエーションが多種多様であるように思えます。これから研究者となるみなさんにも、この広大で魅惑的な文献調査の海に、ぜひ飛び込んでみてもらえることを願っております。



森田思軒草稿より「ヴェルヌ『大東号航海日記』」
個人蔵 笠岡市教育委員会管理 近代書誌・近代画像DB KAMR-00153
https://school.nijl.ac.jp/kindai/KAMR/KAMR-00153#1

国文研にある美文集・文範集（多田コレクションを含む）

国際共同研究の醍醐味

恋田　知子（国文学研究資料館共同研究委員会委員、慶應義塾大学文学部准教授）

いきなり私ごとで恐縮ですが、幼少より飛行機が苦手で国際線は勿論のこと国内線も極力避けて生きてきました。2010年に国文学研究資料館（以下、国文研）で勤務する僥倖に恵まれなければ、おそらく一生海外に行くことはなかったでしょう。そのような私ですが、国文研での国際共同研究に参加したことで得られた貴重な経験や共同研究の醍醐味について、この機会に書き留めてみたいと思います。

◆研究はひとりでやるもの

慶應義塾の学部時代、中世の人々の想像力と信仰に支えられた豊穣なる物語に魅了され、多様な物語が如何にして紡ぎ出されたのか更に深く知りたいという思いが募り、大学院への進学を志すようになりました。試験時間を間違えて入試を受けられず一年の浪人生活を味わった粗忽な私にとって、ようやく進学できた大学院の授業はいずれも高度かつ実証的な内容で、大学受験時以上に学ばなければ付いてはゆけず、先生や先輩方の研究や議論に圧倒されるばかりでした。なかでも慶應義塾の学問の特色である書誌学を体系的に習得できる斯道文庫で古典籍の調査方法を実践的に学べたことは得難い経験でしたが、当時はまだその重要性を真には理解できていなかったように思います。

博士課程に進んでからは、専ら関心を抱いた作品についてそれが生み出された環境を伝える寺院資料をひたすら追い求め、各地の寺院や文庫に赴いては、目当ての資料にひとり一喜一憂していました。デジタル公開された鮮明な画像をインターネット上で瞬時に確認できる現在とは異なり、当時は先行研究や目録類を繰る中で気になる資料を見つけてもそれが考察の対象となり得るのかどうか、現地に赴いて調査してみなければわからない、文字通り手探りの状況でした。そのような状況において、国文研の調査収集事業で撮影・集積された国内外の古典籍のマイクロフィルムは気になる資料を調査前に確認することができるため、とにかく手当たり次第に調べまくっていた院生時代には非常に有り難い存在でした。国内外の古典籍とともにその最新の情報が集積され、それらに基づいた実証的な研究がなされている国文研は、私にとって畏れ多くも憧れの研究機関であり、あれこれと調べに足繁く通ったものでした。データベースやマイクロフィルムを駆使することで、先行研究で指摘されていない資料を見いだすこともでき、新たな研究の扉が開けたこともありました。

そのようにして、幾たびもの書物との出逢いと考察を重ね、発表や論文で数多くのご教示をいただきながら、どうにか博士論文をまとめ上げ、単著として刊行することができました（『仏と女の室町　物語草子論』笠間書院、2008年）。有り難いことに単著を評価していただき、第二回日本古典文学学術賞を受賞したことで、曲がりなりにも一人前の研究者としてようやく自信を持てるようになったように思います。とは言え、人生はそれほど甘いものではなく、当時の年齢を超えるほどの総数の公募に応募し続けても専任職には全く採用されず、気持ちばかり焦って益々ひとり研究に没頭する日々を過ごしていました。

◆多様な観点で対象を見る

転機となったのは、国文研の特定研究「在米絵入り本の総合研究」および科学研究費基盤研究（A）「スペンサーコレクション絵入り本解題目録作成のための総合的調査研究」への参加でした。学会発表でご教示をいただいて以来、論文公表の折には抜刷をお送りしてご教示を仰いでいました小林健二先生、齋藤真麻理先生より、連携研究者にならないかと初めて共同研究に声をかけていただいたのです。2010年春に国文研の機関研究員として勤務することとなったのはこの上ない喜びでしたが、ひとつ克服しなければならないことがありました。「在米絵入り本の総合研究」が主な業務ですので、当然飛行機にしかも長時間の国際線に乗らなくてはならないのです。不遜にも、日本の古典を研究しているのだから海外に行く必要はないなどと思っていた私ですが、憧れの国文研での第一歩です。覚悟を決め初めてパスポートを申請し、2011年3月に人生初の海外での調査出張に同行することになりました。この時は小峯和明先生を先達に、安原眞琴さん、和田琢磨さんと四人でニューヨークの公共図書館を訪ね、スペンサーコレクションを実見しました。それまでも慶應義塾の貴重書など絵巻の優品を見学したことはありましたが、海外に一点しかな

スペンサーコレクションでの調査風景（2011年9月）

いような極上の絵巻を手にとって見るなどなかなかできないことであり、飛行機のせいだけでなく、喜びと興奮でなかなか眠れなかったことが思い出されます。それ以降は年に数度海外所蔵の絵入り本の調査に訪れ、コロンビア大学やハーバード大学での研究集会やワークショップにも参加するようになりました。

物語の生成・享受の場に強い関心を寄せていたことから、その解明に繋がるような寺院資料を追いかけ続けてきた私にとって、国文研での国際共同研究は大変贅沢な修業の場となりました。展示や図録で見るだけに過ぎなかった色鮮やかな絵入り本の優品について、国文学だけでなく美術史や歴史学など多様な学問分野で活躍されている先学の研究者の方々と一緒に現物を見ることができるのです。絵入り本のどのようなところに注目し、考察の手がかりとするのか。本文には書かれていない絵に込められた情報を如何にして読み取るのか。海外所蔵の優品を見ながら絵入り本研究のイロハを実践的に学んだ経験を通して、それまでの自分自身の調査を見直す契機ともなりました。斯道文庫で習得したはずの書誌学の知識も、関心を異にするそれぞれの専門家による見解を伺いながら調査する場を繰り返し経験することで血となり肉となるのだと痛感したのもこの時でした。初めは満足に巻き戻すことすらできなかった巻子本の扱いもこの共同研究で訓練を積んだことで上達したものと感謝しています。

◆他流試合のすゝめ

ひとりで研究をしていると対象に没頭するあまり自分の考察を俯瞰して眺める視点に欠けてしまうことがあります。この国際共同研究を通して、同じ現物を見ていても自分とは異なる視点や見解のあることに触れられたことで、自分なりの方法を模索し確立することの必要性を強く意識するようにもなりました。

もともと奇想天外で幻想的な物語絵よりも中世寺院での説法を彷彿とさせるような宗教色濃厚な絵巻に心惹かれ、スペンサーコレクションの中でも非常に地味な白描の絵巻である『因果業鏡図』について考察することを試みました。「業鏡」とは現世の罪を映し出す鏡を意味し、現世が如何に穢れていて罪深く生き辛いかを述べ、往生を願う僧侶に対して極楽浄土の観想（イメージトレーニング）を説いた絵巻です。色鮮やかな絵があるわけでもなく物語の展開としても面白みに欠けるこの作品に関心を持つのは私以外には数人もいないのではないかと不安に思いながら、研究会での発表を試みたところ、意外にも歴史学や美術史、宗教史など国内外の研究者の方々が高い関心を寄せていることがわかり、非常に心強く、閉じこもりがちであった自分の視野を大いに開かせてくれました。研究会において自分では見出せなかった多様な観点による見解もご教示いただき、改めて本作品を見つめ直したことで、なぜこの絵巻が生み出されたのか、どのような人々に求められたのかという自分の関心の源である問題意識に気づかされ、考察をまとめるにいたりました（「経説絵巻の一展開―スペンサー・コレクション蔵『因果業鏡図』をめぐって―」、国文学研究資料館編『絵が物語る日本　ニューヨークスペンサー・コレクションを訪ねて』三弥井書店、2014年）。

コロンビア大学開催の研究集会（2013年11月1日）

振り返って思えば、大学院の頃も同様に異なる時代や分野の方々と同じ対象を見ていたはずなのですが、当時はその意義を実感できずにいました。偏に私の能力不足、勉強不足によるものです。それを有意義だと思えるようになったのは、手探りながらも自分自身の研究を推し進め、自分なりの方法を模索してきたからであり、ようやく異なる視点の重要性にも気づくことができたのです。遠回りをしてきたようですが、確実に自分が成長していることを実感できるのもまた研究の醍醐味と言えるでしょう。

最近はオンラインによる環境整備が急速に進展してきたことで、国文学の分野でも若手の参加する国際共同研究が行われつつあり、国際学会で発表をする若手研究者も増えているようですので、このような昔語りをせずともその重要性は既知のことであるのかもしれません。それでも、もし当時の私のように、「研究はひとりでやるもの」と頑なにもがいていたり、日本のことをやっているのだから海外に行く必要はないなどと思い込んでいたりする方がいらしたら、ほんの少しでもその肩を押して殻を破る一助にこのエッセイがなれば、とても嬉しく思います。

ブックレット〈書物をひらく〉29

渡部泰明著『雲は美しいか　和歌と追想の力学』

田渕　句美子（早稲田大学教育・総合科学学術院教授）

至福のひとときをもたらす一冊である。96ページ、字数にして5万字位か。数時間あれば読めるだろう。しかしその後もあちこちをめくり直し、読み直したくなる。

著者渡部泰明氏は、専門研究書のほかに、『和歌とは何か』（岩波新書）、『古典和歌入門』（岩波ジュニア新書）、『和歌史―なぜ千年を越えて続いたか』（角川選書）などの一般書を、心を込めて読者に贈ってきた。どの本にも、和歌とはどういう営みなのか、古典の歌人たちはどのような方法・発想で和歌を詠んだのか、という真摯な問いが流れている。本書『雲は美しいか』もそうだ。しかしそれだけではない。この本は、「雲」の文学的形象について語るかに見せて、古典を読むこと、研究することとは何かという、本質的な問いに矢を放つ。

本書の構成を示す。

はじめに――「追憶」
一　歌われた雲
二　『万葉集』の雲
三　平安時代へ――変貌する神女
四　『新古今集』の時代
五　中世和歌の雲と幽玄
おわりに――なぜ古典を学ぶのか、という問いに

『万葉集』から中世後期までの「雲」をめぐるさまざまな和歌の作意を、丹念に読みほどいていく。魅惑的でスリリングである。内容を要約する紙幅はないので、少し引用しよう。「二度と取り返せないものへの哀惜。雲はそういう思いを誘発する。」「雲は人の介入を峻拒する遠い高みにあり、目印になるかと思えば、漠然としていて常に流動し、消え去っていく。だからこそ人はそこにはかない願いを託したくなる。つながらない関係をつなげてほしいと。」「死者を想うあまりに、空の雲に「むつまし」と感じる。……もはやそれは死者と一体化したいという願いをはらむ。雲はそうした昏い欲望をすら掻き立てるのである。」「朝雲暮雨は、死と観念の両極を、両極のままに結びつける。……雲は、現実と遙かなる観念とを結びつける媒介なのである。」などなど。

渡部氏の自在な語りに惹きつけられる。鴨長明の『無名抄』について、「和歌表現の核心について、これほどわかりやすく、思わず肯いてしまうような説得力を感じさせる文章は、かつてなかった。藤原俊頼も藤原俊成も定家も、肝心な本質論については、言葉少なに観念的な用語や比喩で触れるだけですませていた。……読者が一種の安心感を持ちながら読むとしたら、それは作者の術中にはまっていることを示す。」と言い、また正徹の戦略的な語りについて、「なるほどうまい戦略だ。……雲をめぐる表現母体は、幽玄を伴いつつ、正徹においてこれまでで最も大きいといえるほどの働きを見せている。」と述べているが、どうも彼らの姿が渡部氏に重なってしまうのは、私だけではないだろう。

全体を貫く一つのキーワードが「表現母体」である。それは、作者たちによる受容と創作が積み重ねられて、「多層化してゆき、それらを想起し、追想し、新たに生き直すことが、次の表現を生み出す原動力になっていく。その過程を称して、表現母体と見なしたいのである。」と定義される。「言葉の背後に、これまで積み重ねられた古い表現が揺曳する、そのえもいえぬ魅力を伝えようとしているのだろう。古典に育まれた、追想の連続体である、私にいう表現母体の魅力である。走馬灯のように古典を追想し、古典にあえて惑乱する面白さである。」と述べる。「雲」から「表現母体」へ。なるほど、長明、定家、正徹、そして私達も、古典文学を享受する人々がみな、「雲」――クラウドと言ってもいいのかもしれない――のような、厖大で流動する「表現母体」を追い、体験し、繋がり合い、文化的記憶として共有し積み重ね、次の人や時代に受け渡していく時空の中にいるのだ。そしてその分析・検証――この本のような――が次の研究の土台になり、受け継がれていく。

この本の背骨にあるのは、古典文学を研究するとはどういうことで、研究者はどこにいるのか、その方法や目的をどのように社会に伝えていくのか、そして将来のために何をすべきか、などをストイックに問い続ける姿勢であるように思う。「あとがき」で、執筆の重要な契機が、国文研の後継計画「データ駆動による課題解決型人文学の創成」であると述べているが、それで腑に落ちた。古典文学研究の過去・現在・未来がここにある。

ブックレット〈書物をひらく〉28

木越俊介著『知と奇でめぐる近世地誌　名所図会と諸国奇談』

門脇　茉海（公益財団法人日本交通公社副主任研究員）

本書は、江戸時代に生み出された地誌および隣接する書物を「奇」と「知」というキーワードで検討することで、江戸時代の人々の思考様式、世界観を捉えようとする。高校生の頃、京極夏彦の『巷説百物語』シリーズにはまり、“江戸時代の人々はどのように世の中を見つめていたのか。当時の人々の頭の中を覗いてみたい。”と歴史学を専攻した筆者にとって、本書は10代の頃からの問いに対する一つの解を提示してくれた。

現在筆者は、観光に関する研究活動と観光分野でのコンサルタント業務を行う公益財団法人日本交通公社という組織に所属し、歴史文化と観光の望ましい関係構築に関心を持ちながら、日々の業務にあたっている。著者とは、国文学研究資料館が2017年度に開始した歴史的典籍NW事業・異分野融合共同研究「文献観光資源学」のシンポジウムをきっかけに縁ができ、今回書評執筆の機会を頂いた。しかしながら、筆者は日本文学の研究動向に関する十分な知見を有していないため、現在筆者が取り組んでいる観光関連のプロジェクトにひきつけて、若干のコメントを付して本稿をまとめることをお許し願いたい。

当財団では、観光を「見ることや、その場に身を置くこと、体験することにより、感性や知性を通して観光資源の『素晴らしさ』を感じることで、人生が豊かなものになり、人間的な成長を促される行為」と定義している。そして、こうした観光を多くの人が経験できる世の中を目指し、「観光文化の振興」を使命として各種プロジェクトに取り組んでいる。

その中のひとつに1968年から取り組んでいる「観光資源評価研究」がある。これは、観光資源の魅力の基準を整理するとともに、その基準に沿って全国の観光資源を評価、選定して「全国観光資源台帳」として取りまとめるというプロジェクトであり、取りまとめた「全国観光資源台帳」は日本各地の観光基本計画策定や旅行需要喚起等に活用している。ここでいう評価が高い観光資源とは、“来訪者数が多い観光資源”や“生み出す経済効果が大きい観光資源”といった捉え方ではなく、先述した観光の定義に重ね合わせて、“対峙した人の人間的な成長を促す力が大きい観光資源”と捉えるのが適切である。

観光資源の魅力の視点としては、「美しさ」、「大きさ」、「古さ」、「珍しさ」、「静けさ」、「集積度」等の感覚的に把握が可能な視点とともに、「地方らしさ」、「住民とのつながりの深さ」、「歴史的事象／人物とのつながりの深さ」等の、知識があって初めて理解できる要素も評価の視点としている。感覚的に把握が可能な良さ、知識があって初めて理解できる良さ、この両者に優劣があるわけではなく、両者の視点をあわせもって観光資源と対峙することで、その観光資源の素晴らしさを十二分に享受できるというものである。富士山を例に挙げれば、ただ単に「本当に大きくてきれいだね」で満足してしまうのではなく、その美しい姿を生み出したはるか昔の火山活動の様子、その美しい姿が生み出した富士山信仰や、絵画や文芸といった芸術作品にまで関心を広げて富士山を捉えることで、より富士山の奥深い魅力に触れることができる。

本書では、江戸の人々が「奇を通して知の領域を押し広げ」ていく過程が描かれるが、その知的領域の広まっていく様は、観光資源の魅力の多様性、捉え方の幅広さにも通じるように思う。江戸の人々が旺盛な知的好奇心を持って各地を見つめ、その結果としてまとめられた書物が読者の知的好奇心を刺激し、知の領域をさらに広げていったように、現代における旅も、現代の人々が未知なるものを探求し、より深い地域の魅力に目を向け、より多様な世界の存在やそのなかにある自分自身に気づく機会であってほしいと考えている。想定以上に長く続いた時間を経て、ようやく人々が再び旅に出かけはじめた昨今、本書は旅のもたらす根源的な喜びとは何かについて、改めて気づかせてくれる。

古典籍データ駆動研究センターへの誘い

昨年度初頭（2022年4月）に国文研の新たな部局として古典籍データ駆動研究センターが設置されました。設立当初から国立情報学研究所より大山敬三先生をセンター長にお迎えし、当館教員がセンター員を兼務するとともに、昨年度、本年度と新たに情報学、人文情報学を専門領域とするスタッフが着任し、ようやく組織としての体制が整ってきました。設置後間もない部局ではありますが、この場を借りて活動の幾つかをご紹介したく思います。

このセンターは、次世代のデータ基盤の構築と整備といったシステムの研究・開発と、蓄積されたデータの新たな利活用、および新たに蓄積すべきデータの取得方法の開発などのデータコンテンツの研究・開発の2つの領域からなります。システム開発という点では、本年3月に公開した当館の基幹的データ集積基盤である「国書データベース」の開発には本センターの担当教員も関わっています。このデータベースは、「日本古典籍総合目録データベース」として公開していた書誌情報と「新日本古典籍総合データベース」として公開していたIIIF対応のデジタル画像データ情報を統合したもので、さらにテキストの領域を新設しています。書誌情報、画像の2点は、国文研の基盤事業として設立時から収集を継続してきましたが、テキストについては継続的な蓄積は行ってきませんでした。今後はテキストデータについてもどのように生成し蓄積・公開すべきか、またその有効な活用方法などについても研究を進める予定です。そうした活動の一環として、関西大学教授・乾裕幸先生の多大なご助力のもと、関西大学図書館所蔵の稀覯資料・廣瀬本『万葉集』の汎用的な利活用を目指して、TEI/XMLに準拠したデータの構造化を行っています。ご関心のある方は当館のDHポータル（https://dhportal.ac.jp/）からご覧下さい。

『新編国歌大観』や『大正新脩大蔵経』が、古典ライブラリーやジャパンナレッジ、SAT大正新脩大蔵経テキストデータベースといった形でオンライン利用が可能となったことの恩恵は極めて大きなものがありました。他の作品についても、画像とともにテキストの共有が進めば研究それ自体も劇的に変化することが予想されます。そうした新たな研究基盤と研究手法の開発がこの領域の大きな目的です。それとともに、本年初頭に公開されたChatGPTのインパクトを持ち出すまでもなく、今後急速に進むであろうAIの開発と活用といった事柄を日本文学研究と接続してゆくことも今後の課題となるように思われます。

新たなデータの取得方法の開発という点では、書物の持つ物質的な情報の取得と蓄積についての検討を進めています。書物の料紙を構成する植物繊維の精密な画像を得るために、キーエンス社のVHX-8000という高精細デジタルマイクロスコープ等の光学機器を導入し、中世期の古筆切資料と江戸時代後期の草紙を対象とした検討を開始しました。従来取得が難しかった高精細デジタル画像データを用いた書物の成り立ちや年代、地域、伝播経路などの分析が期待されます。昨年度夏には実践女子大学教授・佐藤悟先生の研究チームと共同で「古筆切研究の未来」と題したシンポジウムを開催しました。ご関心のある方は国文研YouTube（https://www.youtube.com/@NIJL）からご覧下さい。また、当センターで整備される機器類は、今後大学共同利用に供される予定です。こちらもご期待下さい。

スタートしたばかりの部局ですが、国文研が50年をかけて積み上げてきた書誌情報とデジタル画像データに次ぐ充実したデータの蓄積と公開、また、それらを用いた新たな研究方法の開拓に寄与して参りたく思います。

（海野　圭介）

図1 国書データベース

図2 DHポータル

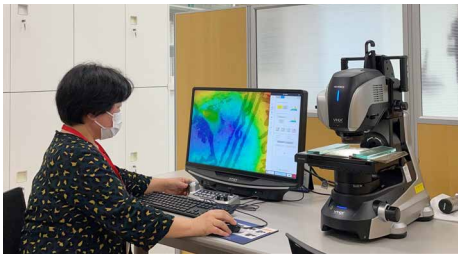


図3 VHX-8000による高精細データ取得

国際連携室「文献資料ワークショップ」―典籍との対面―

古典籍がデジタル化され、所蔵機関によってネット上にその画像が公開されているということは近年、至って当たり前の環境となりました。当該データへのアクセスは国内外問わず、各地の利用者にとっても大変容易なもので、真の意味で世界に開かれた日本学の基盤構築へ大いに貢献しています。一方で、その種々の一次資料を有益に使うための研究ノウハウに関しては、研究対象に比べてそのアクセス問題が未だに改善されず、せっかくの公開データの利活用のハードルともなっているといえます。

「文献資料ワークショップ」は、このノウハウ伝達の課題を意識して2020年の秋に発足した、当館国際連携室の活動です。次世代研究者を主な対象にしながら、資料活用に携わる司書や教育者等の参加も歓迎し、古典籍の取り扱い方の概説、一次資料の調査・利用方法の説明等、実践的なガイダンスを提供するワークショップとして、4年にわたって計8回開催してきました。

毎回違う一種類の原資料をテーマに定め、講師に呼ばれたその専門の研究者が当館所蔵の資料等を使いながら説明を進める、といった形式を取ります。実施時間を2時間程度とし、(1) 前半で講師が資料の概説を行って質疑応答を受け、(2) 後半で様々な実例に触れさせながら具体的な扱い方などを教えます。一貫して参加者同士の交流に重点をおいた、対話型のワークショップを心がけています。

感染症の影響により、第1回～第6回のワークショップをオンライン開催で行わざるを得ませんでしたが、対策の緩和に従って昨年度より、ハイブリッド方式を併用しながらも、対面で行うことができました。また、この本来あるべき姿の開催の復活に合わせ、これまで当館主催だった実施方法から、当館協定先ともなるIUC（アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター）との共催という開催形式に移行し、特に研究者育成に重点を据えました。

以下は、昨年度対面で参加した学生2人の観覧記を翻訳したものです。　（ノット・ジェフリー）

第7回　日本近代の文例集（多田蔵人）[2022.11.4]

エイミー・ウェイ

11月に国文学研究資料館で、IUC生何人かと一緒に、明治期以降の文例集というテーマで多田蔵人先生のお話を伺う機会がありました。2時間にわたるワークショップでしたが、その前半で、文例集というものの概説、その研究の現在、また明治大正期におけるそのジャンルの意義について学びました。その後半では、多田先生個人で集められた文例集で、19世紀～20世紀からいくつもの実例に触れることができました。この間次々と私たちの質問に答えていただきながら、本それぞれの特徴や構成等についてもいろいろ教えていただきました。

私自身は日本文学の専攻ですが、あとで専攻の異なる同級生と話してみても、私と同じくらい、多田先生のワークショップは貴重で大変興味深いものだったと思っている人ばかりでした。今後も国文研と関わるような機会がまたあれば嬉しい、と思っていたのも、私一人だけではありませんでした。

多田先生より近代文例集の案内を受ける留学生

第8回　中世の絵巻（粂汐里）[2023.1.13]

アンドリュー・フォン

1月にIUCの同級生何人かと国文学研究資料館を訪問し、粂汐里先生を講師に迎えた「絵巻」というテーマのワークショップに参加しました。前半では、粂先生から絵巻の特徴と歴史を紹介した、簡潔で有益なお話がありました。その中で特に印象的だったのが、江戸期における絵巻の作成と消費を具体例で説明した部分でした。後半では参加者に、国文研所蔵の中から貴重書指定の絵巻を自らの手で扱うことが許され、その正しい巻き方などを教わりました。

美術史を専攻にしている私にとっては、大変役に立つワークショップだったと思います。全体的に面白くかつ実践的で、また、特に参加したIUC生にとっては、日本国内で研究の最前線に立っているような先生にお会いできる場としても、大いに意味がありました。今後とも同様の機会を楽しみにしたいと思っております。

粂先生の助言を受けながら、絵巻の読み方を実践

― これまでの「文献資料ワークショップ」シリーズ ―

第1回	和刻本漢籍（山本嘉孝）	[2020.11. 4]
第2回	奈良絵本・絵巻（齋藤真麻理）	[2020.11.26]
第3回	江戸時代の版本（木越俊介）	[2020.12.16]
第4回	禅宗の仮名法語（ダヴァン・ディディエ）	[2021. 4.27]
第5回	『源氏物語』の注釈資料（ノット・ジェフリー）	[2021. 7. 1]
第6回	近世の歌書（神作研一）	[2021. 9. 9]

※写真はどちらもBruce Batten先生撮影

能狂言研究への温かな誘い　―日本古典籍セミナー北京 2022―

日本古典芸能の魅力に惹かれ、能楽研究を志してから、既に3年の歳月が過ぎました。2022年9月からの4ヶ月間、私は野上記念法政大学能楽研究所で訪日研修を行い、山中玲子先生と宮本圭造先生のもとで、能楽に関する数え切れないほどの知識や経験を学ばせて頂いておりました。まさか帰国間もなく、2023年3月26日にオンラインで行われた日本古典籍セミナー北京2022で、Zoom ミーティングを通して再び両先生の素晴らしきご講義を受ける機会を得ることができるとは、正に僥倖でございました。

先ずはシェラー・クインタナ先生のボストン美術館に対する紹介ですが、10万点以上の日本美術品コレクションは世界にも誇る規模で、うちに深井・阿古父尉のお面や狩衣・厚板の能装束など能狂言に関わる所蔵品も非常に豊富でして、機会があれば是非その目で確かめたいと、講演を聞いて大いに興味を持ちました。ボストン美術館のコレクションに寄与したモース・フェノロサ・ビゲローという3名のうち、モースは1882・1883年に日本での観能記録が残され、フェノロサは大量の能楽研究ノートを遺し、その成果はパウンドの手によって『Noh or Accomplishment』(1916) の形でまとめられ、ビゲローはモースと共に日本滞在の間、夥しい数の能面・能装束を蒐集しました。能楽の国際進出に関心を抱く私にとって、シェラー先生の講演内容は正に目を輝かせるものばかりでした。

能研に滞在していた期間、閲覧室で資料取集を行う一時は至福と言うよりほかありませんでした。選り取り見取りの雑誌資料、門外不出の秘蔵謡本、全揃いの能楽堂特集等々、能楽研究を支える全てがそこに詰まっていると言っても過言ではなく、正に「能楽資料の宝庫」―宮本先生のご講演のタイトル通りでした。先生が紹介して下さった能楽研究所創設にまつわる話は詳密で分かりやすく、「資料取集」という能研創設当初の重点事項は、私が4ヶ月間で身を以て感じ取った重みそのものでした。財閥解体で古書が数多く流出するという好機を掴み、先人たちが能楽資料を大量に引き継いだという話は、戦後の時代の奔流に向ける新たな視点を提示されたかのように、非常に興味深い話でした。有難いことに、宮本先生の授業を通して、此度の講演で展示された謡本・図鑑・絵巻など、能研の貴重な所蔵品をその目で見る機会は私にもありました。勿論、私が見たものは氷山の一角に過ぎず、写本が数冊しか存在しない『二曲三体人形図』や『吉川家旧蔵車屋謡本』、美術的価値の高い『童舞抄』といった能研の誇るコレクションは、今回を機に初めて触れたものばかりでした。最後に、海外に所蔵される資料は主に能面など、文字資料は非常に少ないという現状への言及は、関連する研究を進めている私にとって心に響く言葉でした。

有難いことに、法政大学能楽研究所所長を務めていらっしゃる山中先生の授業をこれまで幾度か受けていました。授業の小書演出に関する緻密な解説・分析は勿論圧巻でしたが、最も印象を残したものと言えば、先生の授業の導入の雑談だと思います。親切さ、ユーモアが満ち溢れた能関連のトークの裏に、長年の経験で積み重ねた圧倒的な知識の量、能楽に対するひたむきな心が滲み出ているからです。そして此度の山中先生のご講演には、能をより多くの人々に広めたいという熱意がしみじみと感じられました。能研究の道のりを一歩踏み出したばかりの私が言うのはおこがましいかもしれませんが、今回の講演内容は能楽研究における基礎知識であり、PPT だけを見ると、知識そのものに目新しさが聊か不足かと思いきや、先生のご講演の分かりやすさ・上手さには感服の一言でした。例えば、能狂言の「兄弟関係」について説明する時、先生はハリウッドによく出てくる退屈なエリートお兄さん・チャラチャラのユーモラスな弟を例として挙げました。そのイメージが一瞬で脳内に浮かび上がる感覚は今でも鮮明に覚えております。そして、面・装束の紹介部分で使用された写真の中に、能装束を両手で広げる観世善正先生の姿を見ると、思わず4ヶ月前の矢来能楽堂での実技研修を思い出してしまい、身近で能に触れることの大切さと有難さを改めて痛感しました。能の技芸伝承を紹介するために使われた資料のうち、『舞台之図』のような授業で見たものもあれば、『芨蓮江問日記』『真徳鏡』など初めて知る資料もあります。役者の視点で書かれた伝書と現在の観客席の視点からの能舞台構図との方向的違いに気を付けるべきという指摘も印象深いものでした。最後の笛の曲譜と乱拍子の譜を理解することは、今の私ではまだ無理ですが、いつかそれらをも読み解けるよう、これからも精進したいと思います。

能を観る時、大まかなことを知れば十分であり、細かい点を気にせず軽い気持ちで舞台を楽しもうと、山中先生は柔らかい口調でおっしゃいました。初心者に向けた温かな誘いでありながらも、能を数回しか観ることが出来なかったばかりでなく、謡本に夢中のあまり舞台演出を見逃すことが多々あった私には、正に耳の痛い指摘でした。能は確かに奥深い古典芸能ですが、その本質は「モノマネ」の舞台芸術であり、知識がなくとも心に響かせるものは必ずや舞台上に存在します。此度のセミナーを通して、より多くの者が能楽に興味を持ち、私と同様に幽玄の世界を歩くようになることを、心から期待しております。

（北京外国語大学北京日本学研究センター修士課程　李　知雨）

講演会「源実朝の歌はなぜ心を打つのか」

2022年12月2日18時30分より国文学研究資料館創立50周年記念事業として、渡部泰明館長による「源実朝の歌はなぜ心を打つのか」を開催しました。

渡部館長は2022年度NHK大河ドラマ『鎌倉殿の13人』の和歌考証を担当しており、和歌研究に関する多くの研究・著作があります。

今回の講演の内容は鎌倉幕府三代将軍で、多くの和歌を残し、最期は鶴岡八幡宮で非業の死を遂げた源実朝の和歌に着目して、「実朝自身が何をどのように詠もうとしたのか、旅にまつわる歌を手掛かりにして、彼の表現者としての原点に立ち戻り、考えてみたい」というものです。様々な「境界」に位置して繋ごう（あるいは紡ごう）と試みる実朝の和歌、例えば都と東国、海と陸、理想と現実の「境界」にいる実朝が異世界への冒険者として和歌を詠み込んだ点に心を打つ要因があると論を展開していきました。講演の中でNHK大河ドラマ『鎌倉殿の13人』に登場した「春がすみたつたの山のさくら花おぼつかなさを知る人のなき」に関する解釈についても触れました。

当日は新型コロナウイルス感染症対策のため、YouTubeライブによるオンライン配信となりましたが、その際のチャットにおいても実朝の境界性については多くの方が感銘を受け、「新たな実朝像を知ることができた」と書き込んだ参加者も多くいました。

当日は海外からの視聴も含めて視聴数は1090回に達し、アーカイブ視聴数は4250回（2023年6月12日段階）です。アーカイブ配信はQRコードよりご視聴頂けますので、ぜひご覧ください。

（西村　慎太郎）

ようやくクラウドファンディングのお礼ができました

2020年6月、国文学研究資料館では「地域文化再生を担う専門家を育成──アーカイブズ・カレッジ継続へ」と題したクラウドファンディングを実施しました。これは、財政不足の中にあって、国文研が毎年全国各県を訪れて開催しているアーカイブズ・カレッジ短期コースの経費を捻出するためのものでした。約2か月の募集期間で、予想をはるかに超える261名の方々からのご応募をいただき、当初目標の2倍以上の625万7000円もの寄付金が集まりました。この間には皆様からさまざまな叱咤激励をいただき、アーカイブズ・カレッジへの期待を身にしみて感じることができました。改めてこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

早速いただいたご厚志に対する返礼を行うべきところでしたが、折しも新型コロナ感染症が猛威を振るっているさなかで、お約束した返礼のうち対面型・体験型の返礼の実施は、延期に延期を重ねざるを得ませんでした。コロナの流行が下火になってきた2022年10月、ようやく前年の短期コース開催地である島根県松江市で講演会を開くことができ、翌11月には2022年の開催地である福島県富岡町での講演会を開催しました。そして2023年1月11日、寄付者の方々を国文研へお招きし、書庫見学・史料整理体験・保存措置体験を実施することができました（2月・3月にも書庫見学を、5月には講演を実施しています）。

史料整理体験では、一人一人の前に江戸時代の古文書を用意し、それを実際に手にとって解読しながら、表題や差出人・宛先などのデータをパソコンに入力していただきました。また、保存措置体験では、専門家のデモンストレーションを見ながら、史料の形に合わせて中性紙の包材を作ったり、史料にラベルを貼る体験をしていただきました。

おかげさまでクラウドファンディングの資金を活用して、2021年には島根県松江市で、2022年には福島県富岡町で短期コースを実施できました。2023年には、大分県大分市での開催を予定しています。いただいたお志を大切にしながら、一人でも多くのアーキビストを育てるため、教員一同、努力を続けていきたいと思っています。

（太田　尚宏）

モバイルミュージアム巡回展「小良ヶ浜の歴史・文化」開催

2022年11月6日より福島県双葉郡富岡町の「文化交流センター学びの森」において、モバイルミュージアム巡回展「小良ヶ浜の歴史・文化」を開催致しました。モバイルミュージアムとは、折りたたみ式の「移動型展示」のことです。今回の展示は人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して」国文学研究資料館ユニット「人口減少地域におけるアーカイブズと歴史文化の再構築」（研究代表者　西村慎太郎）の研究成果の一部として、多くの富岡町町民にご覧頂くために作製しました。

富岡町小良ヶ浜は「日本一小さい漁港」と評された地域で、東京電力福島第一原子力発電所事故に伴って現在でも帰還困難区域に指定され、立ち入りが制限されています。その小良ヶ浜の歴史と文化を後世に遺すため、富岡町役場で横断的に結成された「歴史・文化等保存プロジェクトチーム（歴文PT）」皆さんたちや天野真志氏（国立歴史民俗博物館准教授）・井上拓巳氏（さいたま市教育委員会学芸員）とともに『小良ヶ浜』という地域の歴史をまとめた本を2022年に刊行しました。この本の内容をコンパクトにまとめて、展示したのが今回のモバイルミュージアム巡回展「小良ヶ浜の歴史・文化」です。

モバイルミュージアムは6基設置し、小良ヶ浜の生業や文化、寺社や石造物、昭和期に盛んだったソフトボールやバレーボール、グラウンドゴルフなどのスポーツ大会といった小良ヶ浜に関する歴史が盛りだくさんな内容になっています。パネル作製には、とみおかアーカイブ・ミュージアム学芸員の門馬健氏と検討を重ね、天野氏・井上氏・門馬氏をはじめとして、とみおかアーカイブ・ミュージアム学芸員の三瓶秀文・土屋賢一両氏、富岡町役場職員の大和田侑希氏が執筆しました。

2023年1月20日からは富岡町役場いわき支所に展示場所を移しました。このあと郡山支所への巡回も予定しており、避難している多くの町民皆さまにご覧頂きたいと思っております。

（西村　慎太郎）

2022年度第2回こくぶんけんトーク
その話を、どんな本で読んでいますか？ ―「本」の時代の物語

2023年2月13日（月）、国文学研究資料館・多摩信用金庫の共催による2022年度第2回こくぶんけんトークが、国文学研究資料館2階大会議室において開催されました。こくぶんけんトークとは、当館の研究者が会話をしながら講座をおこない、参加された方々に研究の概要に触れていただくというイベントです。今回は講師を日本近代文学を専門とする多田蔵人准教授が、コーディネーターを特任助教の松永瑠成が務めました。

旧来の和綴じされた和装本だけでなく、製本方法や形そのものも新しい洋装本が広く普及し、浸透したのは明治時代でした。「その話に、どんな本が出てきますか？―「本」の時代の物語」と題された講座では、そうした時代において作者たちが洋装本という新しい「本」とどう向き合い、そして小説や詩のなかの道具としてどのように使っていたのかを夏目漱石・芥川龍之介・永井荷風らの作品から読み解きました。たとえば、夏目漱石の『虞美人草』に描写された「紫の栞の房」や、芥川龍之介の『歯車』にみえる乱丁本などを端緒として、それぞれの作品の登場人物に加えて作者自身、そして読者と「本」との関係を紐解くとともに、その背景にある当時の出版の状況や本を取り巻く環境などについて解説していただきました。また、永井荷風の『来訪者』の題材である「偽書本」から、自筆原稿の価値の変遷や研究資料としての可能性に関してもお話しいただきました。

当日は会場に多田講師の所蔵資料が陳列されており、参加した方々は休憩時間を利用し、実際にそれらの資料を手に取って閲覧されました。最後におこなわれた質疑応答では、講座の内容がさらに深まる質問が多く寄せられ、盛況のうちにイベントは閉会しました。

参加者のうち、大学で近現代の文学理論を学ばれている方からは、作品内外の「本」に着目する視点や研究がとても新鮮だったとの感想をいただきました。今後もこのこくぶんけんトークをとおして、論文では伝えきれない研究の奥深さ、またその面白さを一人でも多くの方々に伝えていくことができれば幸いです。

（松永　瑠成）

ないじぇる芸術共創ラボ　アウトプットイベント４件

「ないじぇる芸術共創ラボ　アートと翻訳による日本文学探索イニシアティブ」は、各界で活躍するアーティストと翻訳家をAIR・TIRとして当館に招き、研究者とともに古典籍を紐解くことによって得た知見と感性から新たな文化・芸術的価値を創出する事業です。昨年度の活動の一部をご紹介します。

講演会「源実朝の歌はなぜ心を打つのか」

2022年12月2日に、当館の渡部泰明館長が講師を務める講演会をYouTube Liveにより開催しました。渡部館長は中世から近代まで高く評価され続けてきた源実朝の和歌から、初恋と旅がテーマのものをいくつか取り上げ、詠歌の技法や歌に詠み込まれた心情、およびその歴史的・社会的背景を丁寧に解説してくださいました。

※各QRコードからイベントの紹介や動画をご覧いただけます。

「ないじぇるクリエイティブ会議 ―古典のミライにアイデアを！―」

12月18日にZoomウェビナー及びYouTubeライブ配信で開催したこのオンライン会議は、AIR・TIRと研究者たちがともに古典籍の魅力を探求してきた過程で培った経験と成果を開放し、参加者と一緒に古典のミライをつくるヒントをさがす新しい試みです。

第一部ではまず、京都女子大学の小山順子教授にないじぇるの歩みを振り返り、お話をいただきました。次に、AIRの染谷聡氏、谷原菜摘子氏、片渕須直氏とTIRの毛丹青氏に、ないじぇるで古典籍と出合うことが創作活動に与えた影響や、そこから生まれた作品などを紹介していただきました。第二部では、東洋大学の山中悠希准教授と当館の齋藤真麻理教授をコメンテーターに迎え、ディスカッションを行いました。さらに第三部では、参加者からの感想や質問を踏まえ、フリートークの時間を設けました。過去を題材に新たな創作を行う時の伝統と革新のバランスなど、「古典のミライ」を考える際にヒントとなるコメントをたくさんいただき、活発な意見交換ができました。

また、アンケートで古典籍の新しい利活用法についての「アイデア」を募集し、イベントのWEBサイトで公開しました。音楽、ゲーム、漫画やアニメ、さらに古典教育まで話題が広がり、古典とアートの可能性を夢見させてくれた、実りの多いイベントとなりました。

トークイベント「一冊対談集 クリエーターと語るこの国の古典と現代 第9回 渡部カンコロンゴ清花×ロバート キャンベル 日本古典に現れる「共生」思考とプラクシス」

日本に来た難民の活躍機会を作り出すNPO法人WELgee代表の渡部カンコロンゴ清花氏と当館のロバート キャンベル名誉教授による対談を収録し、動画公開を行いました。災害や貧困など、日本が向き合うべき課題を古典籍から紐解き、社会における文学の役割を語り合いました。

「ないじぇる芸術共創ラボ二人展 染谷聡×谷原菜摘子 ―わだかまる光陰」

2023年1月11日～17日、書物・文学・芸術が交差する空間、神保町の古書店街に店を構える文房堂ギャラリーにて、AIRの染谷聡氏と谷原菜摘子氏による二人展を開催しました。

ないじぇる二人展会場の様子

漆芸家の染谷氏は、江戸後期の絵本『東海道五十三駅 鉢山図絵』を糸口に、五十三次の地に息づく歴史と景色、時間と空間を凝縮した新しい作品シリーズ《みしき｜53》を展開しました。画家の谷原氏は、古典籍『長谷雄草紙』、『方丈記』、『西山物語』を自身の世界観で再解釈・再構築した絵画作品を中心に展示し、作品の独特な世界を描いたオリジナル物語を会場で配布しました。また、二人のアーティストが創作活動について語ったインタビュー動画を会場で上映し、日本語・英語・中国語字幕版をWEBサイトで公開しました。

展覧会は様々な面で古典文化のポテンシャルを観客と共有することができ、研究者、アーティストのみでなく、出版業界や古書業界など、多くの方にお楽しみいただきました。

（立正大学経済学部特任講師　黄　昱）

（文中の所属や役職はイベント開催当時のものです。）

総合研究大学院大学 日本文学研究コースの近況

■20周年を迎えて

国文学研究資料館を基盤機関として総合研究大学院大学の日本文学研究専攻が設置されたのは、2003年4月のことでした。以来20年、課程博士21名、論文博士13名が誕生し、卒業生たちは国内外の大学等で活躍しています。教育研究にご協力下さった多くの方々に改めて感謝申し上げます。

この大学院は博士後期課程のみですので、3年間で学位（文学）を取得すべく、堅実な計画性と実行性が求められます。学位取得後の研究人生を全うするためには、視野を広げる努力も欠かせません。院生1名を教員3名が担当する複数指導体制のもと、院生たちは文献資料の調査と研究を精力的に行い、他専攻のプログラムにも積極的に参加するなどして執筆に取り組んでいます。

新入生懇談会の様子

■総研大が1研究科に移行

このように自身の専門性を掘り下げながら、他専攻にも学ぶ機会を得られるのがこの大学院の魅力の一つです。2023年4月より、その特長がさらに充実しました。従来の6研究科20専攻は、先端学術院1研究科20コース体制へ移行し、全コースのカリキュラムも大幅に見直されました。

日本文学研究専攻は、日本文学研究コースとして新たな一歩を踏み出します。高い専門性を有しつつ、他コースとの境を越えた多彩な学修の機会が準備されています。2005年創刊の査読誌『総研大文化科学研究』は海外でも高い評価を得ており、引き続き、言語を問わず広く投稿を受け付けます。

懇談会にて大学院のプロジェクトで選定した古典籍を閲覧

ここに学ぶ方々には、充実した研究資源と研究ネットワーク、さまざまな成果発表の場を活用し、研究力を養って頂きたいと思います。秋には教員による研究紹介を含めた入試説明会を行います。是非、「国文研の大学院」を体験しにいらして下さい。　（齋藤　真麻理）

■日本文学研究コースに新入生を迎えました

この春、本コースは2名の入学生を迎えました。ご入学おめでとうございます。おふたりは本専攻が日本文学研究コースに移行して最初の入学者です。

この場所で、国文学研究資料館が創立以来50年以上にわたり集積してきた良質な資料を活用し、また、旅費や複写・図書購入等における経済的な支援を活かしながら、充実した研究生活を送られることを願っています。

■令和4年度特別講義
青木 睦 准教授 最終講義
「文庫蔵の調査から日本アーカイブズ建築論へ」開催

3月24日（金）、国文学研究資料館大会議室において令和4年度特別講義を開催しました。対面による実施は3年ぶりで、講義はZoomとYouTubeを併用して行われました。講師の青木睦准教授は3月末で定年退職を迎えることから、今回が最終講義となりました。

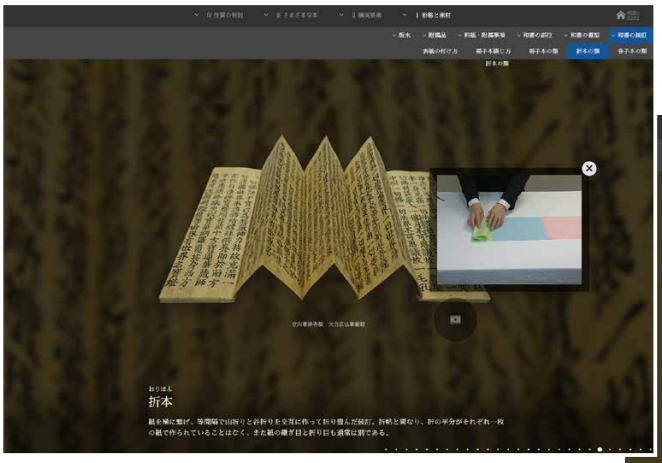
講義では、国内各地の寺院や文庫に赴き、伝存する膨大な文書等を調査し、整理した過程について、現地の豊富な写真とともに、調査前の状態の正確な記録から適切な保存措置に至るまでを臨場感あふれる語り口調で解説されました。聴講の申し込みは館の内外、海外からも寄せられて180名を超えました。会場には青木准教授と長年にわたって親交のあった30余名が集まり、研究の歩みに熱心に聞き入っていました。講義終了後には青木准教授へ教員・学生から花束が贈られ、会場は大きな拍手で包まれました。

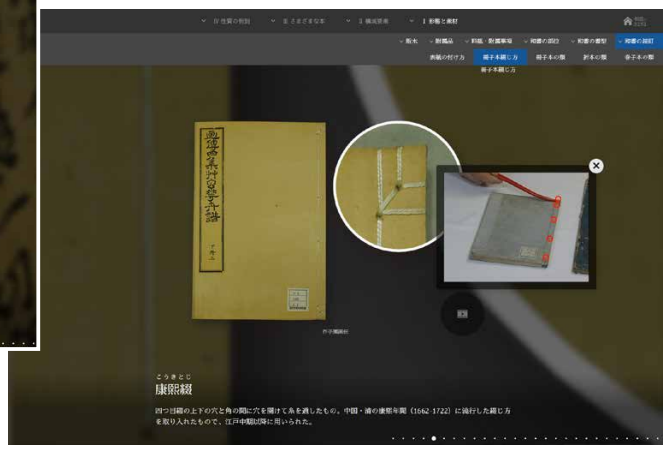
資料調査をした現地の写真を
豊富に提示しながら解説する青木准教授

電子展示室「和書のさまざま」のご案内および通常展示について

通常展示を3月より「和書のさまざま」に入替え、7月24日まで開催しています。事前予約なしで当日直接ご入場いただけるようになりました。ウェブ版の展示「和書のさまざま」をもう覗いていただきましたでしょうか？お蔭様で公開から3千人を超える皆さんにアクセスしていただいています。まだの方へご紹介するために、利用の様子をビデオにしました。QR コードからご覧ください。通常展示の会場でも上映しています。

ウェブ版は通常展示の構成に準じた、和書のさまざまな姿や特色を見ながら書誌学の基礎を理解できる内容です。実演しながらの解説ビデオを活用したウェブならではのコンテンツになっています。展示資料のデジタル写真を見ながら展示室さながら順路に沿って解説を読み進めます。また、展示構成を眺めて興味ある所から覗いたり、書誌学用語を調べて図鑑のように使うこともできます。興味の赴くまま好きな方法で、自由に電子空間の展示を巡り歩いてください。（北村　啓子）





表紙絵資料紹介

『源氏百人一首』（当館蔵　初雁文庫12-601）
江戸末期頃写。15×6cm、折帖1帖。絹本彩色。表紙に「番外」と記す。

小型の源氏香図に、黒沢翁満『源氏百人一首』の人物名および和歌部分を書き込んだもの。図様を持たない桐壺と夢浮橋を見返しとして趣意絵を描く。翁満の『源氏百人一首』は子女向けに桐壺帝以下百人（百二十三人）の主要作中人物を選び、その和歌を一首ずつ紹介し絵と注解を施した書物であり、天保9（1838）年の橘守部のものをはじめとする三種の序を有する。

形態の類似する源氏香図にはたとえば早稲田大学九曜文庫蔵〔30-a0307〕・〔30-a0327〕本などがあり、いずれも江戸末期のものと見られる。香図に一巻一首の和歌の書き込みを行うものはままあるが、本作品のように『源氏百人一首』を利用したものは珍しい。

折帖の末尾には「北澤正教書」との署名がある。この名は勤王の志士の中に見出される。すなわち北澤正教（金平）は天保2（1831）年信濃国の造り酒屋の長男として生まれ、佐藤一斎・佐久間象山の門下に入った。慶応4（1868）年、仁和寺宮嘉彰親王方より北越戦争に従軍し、手記『越の日記』（菅平研究会刊）を記した。詠歌を能くし細筆にも妙を得、上京の折には新玉津島神社（藤原俊成や北村季吟所縁で知られる）に『古今集』千百余首をしたためた扇面を奉納した他、公卿方にも自書の細筆を献上し、返礼の短冊なども多く賜ったという（北澤の経歴は前掲『越の日記』および『長村誌』（長野県真田町長財産区刊）参照）。もしも本作品がこの人物の書写であれば、そうした贈答の折の遺品であろうか。幕末・維新期の人的交流の中で〈王朝の香り〉が果たした潤滑油的な役割に思いを馳せる。西下経一氏旧蔵。　（中西　智子）

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3
Tel:050-5533-2910　Fax:042-526-8604

国文研ニューズNo.63
発行日　令和5（2023）年6月19日
編　集　国文学研究資料館　資源活用連携部
製　作　株式会社トリッド
ⓒ人間文化研究機構国文学研究資料館